五　反　廃　寺

町道五反線改良工事に伴う発掘調査

岡山大学附属図書館
60002823614

２０００年３月
久世町教育委員会

217
G
資料
01

LF217
G

郷土資料

久世町埋蔵文化財発掘調査報告 4

五　反　廃　寺

町道五反線改良工事に伴う発掘調査

２０００年３月
久世町教育委員会

受　贈
中　央　館
101000010

序

この報告書は、町道五反線改良工事に伴い発掘調査を実施した五反廃寺の報告書です。五反廃寺は、奈良時代前期の創建になる古代寺院として久世町で最も著名な遺跡です。このたび、寺域の北辺部を東西に通る町道五反線の拡幅工事が計画され、やむなく発掘調査を実施して記録保存の処置をとることになりました。

今回の発掘調査では、平成5年度に実施した寺域確認調査で見つかった寺域の北辺を画する溝の延長上で、この溝の続きを検出することができました。これにより、従来より高い精度で五反廃寺の北辺を確定することができ、五反廃寺の全容解明にとって貴重な成果となりました。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、お世話になりました地元の方々を初め、発掘調査の全般にわたりましてご指導を賜りました久世町文化財保護審議会委員の皆様には、厚くお礼申しあげます。

平成12年3月

久世町教育委員会

教育長　竹　藤　章　正

例　言

1．本報告書は、岡山県真庭郡久世町大字三崎における町道五反線拡幅工事に先立ち、久世町教育委員会が発掘調査を実施した五反廃寺の報告書である。

2．五反廃寺は、久世町大字三崎625ほかに所在する。

3．発掘調査は、久世町教育委員会が主体となり実施した。

4．発掘調査及び報告書の作成は、久世町教育委員会生涯学習課池上　博が担当した。

5．出土遺物・図面・写真等は久世町教育委員会（久世町大字久世2932-5）に保管している。

6．発掘調査にあたり、炎天下のなか作業を行って下さった孝井照子、豆原　正、矢谷次郎の諸氏にはこの場をお借りして感謝申しあげます。

凡　例

1．本報告書で用いた高度は海抜高である。また、座標は国土法に基づく第Ⅴ座標系である。方位はすべて真北である。

2．本報告書で使用した土色は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

本　文　目　次

Ⅰ．周辺の地理的・歴史的環境……1
Ⅱ．発掘調査の経過……4
　1．調査に至る経過……4
　2．既往の調査……4
　3．調査の経過……5
Ⅲ．発掘調査の成果……7
　1．遺構……7
　2．遺物……7
Ⅳ．まとめ……10

挿　図　目　次

第1図　久世町位置図……1
第2図　周辺遺跡分布図……2
第3図　調査地点位置図……6
第4図　調査区および土層断面図……8
第5図　ＳＤ1推定ライン……9
第6図　軒丸瓦拓影・実測図……9

表　目　次

第1表　五反廃寺発掘調査一覧……5

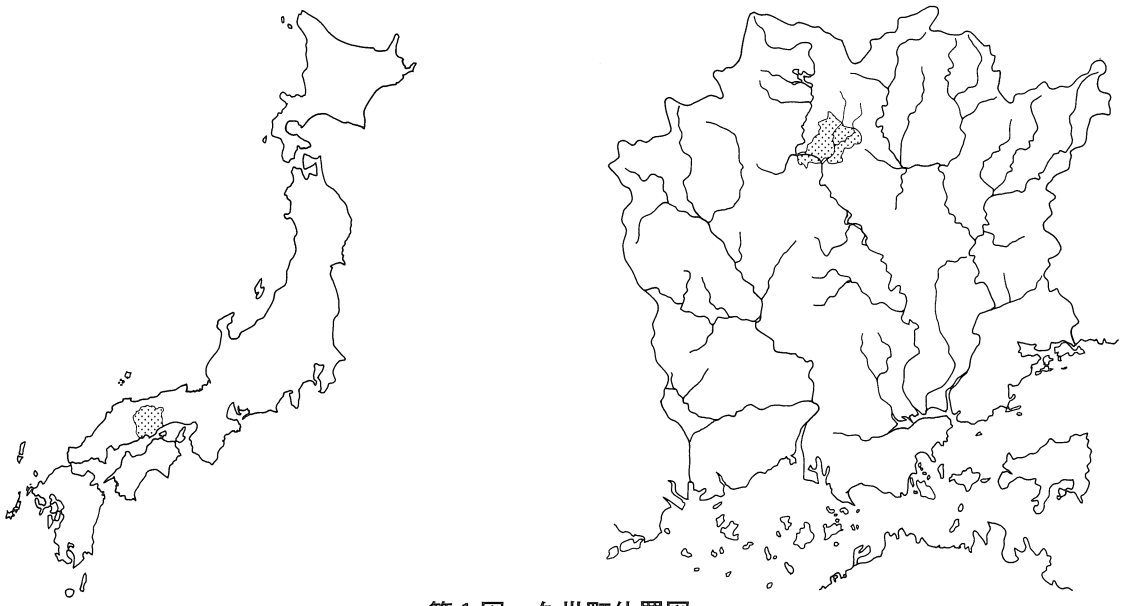
写　真　目　次

写真1　牛市で賑わう商店街（昭和初期？）……4

図　版　目　次

図版1　1　目木平野周辺（東から、航空撮影）
　　2　五反廃寺周辺（北西から、白猪屯倉碑）
図版2　1　調査前状況（東から）
　　2　調査区北壁土層断面（南東から）
図版3　1　調査区南壁土層断面（北東から）
　　2　ＳＤ1土層断面（南西から）
図版4　1　調査区全景（東から）
図版5　1　軒丸瓦（ＩＢ型式）

Ⅰ．周辺の地理的・歴史的環境



第１図　久世町位置図

旭川の支流である目木川は、富村に源を発し、中国山地の急峻な山間地域を蛇行しながら南流し、目木平野に至って流速を落としながらやや西に向きをかえる。そして、五反丘陵の裾をかすめるように笹向山との間を流れ下り、旭川と合流する。五反丘陵は、南に大きく張り出し、頂部は極めて平坦となっているが、水利がよくなかったために水田化が遅れ、主に畑地として利用されてきた。近世後期以後は、たびたび水田化のために用水路の建設計画が持ち上がったものの、主に資金面での問題から立ち消えとなっていた。その後、明治初年になって地元の悲願であった金屋用水が完成し、これ以後は水田としての土地利用が顕著となっていった。しかし、今日では全国的な米あまり現象と用水路の管理経費の高騰などの多くの問題をかかえている。

五反丘陵の東側に位置する目木平野は、目木川が形成した肥沃な谷底平野であり、中国山地と吉備高原の境界域に点在する盆地群の一つである。この平野は、古来から交通の要衝として栄え、周辺には数多くの遺跡が残されている。この地区で最古の遺跡は、縄文時代早期の押型文土器が出土した大旦遺跡（註１）である。しかし、出土量は僅かであることからキャンプサイト的な性格の遺跡であろう。周辺地域では、縄文時代の各時期の土器が僅かながら出土しており、縄文時代を通じて同様のあり方であったようである。

弥生時代になると、初期の米づくり集落として五反遺跡（註２）が現れる。出土土器によれば前期の新段階に相当する。五反遺跡は弥生時代後期まで継続して営まれており、北に位置する大旦遺跡とともに、周辺地域の拠点的集落として推移している。弥生時代後期になると、生産技術の向上により耕地が拡大し、それに伴って拠点的集落からの分村という形で集落数が増加する。細シ遺跡、多田須遺跡、上連遺跡、戸坂遺跡など、目木平野を見下ろす小丘陵や扇状地に立地する小規模集落がこれに相当する。また、目木川上流域の小平野を生産基盤とする小集落が出現するのも、この時期である。

古墳時代になると、初現期の前方後円（方）墳は認められないものの、５世紀後葉と考えられる金

第２図　周辺遺跡分布図(1/12000)

１．五反廃寺	２．五反遺跡	３．岡松遺跡	４．大旦遺跡
５．金屋古墳群	６．長光寺古墳群（消滅）	７．蛇ノ尾古墳群	８．散布地
９．多田古墳群	10．新池古墳群	11．細シ遺跡	12．多田須遺跡
13．上連遺跡	14．戸坂遺跡	15．戸坂古墳群	16．西口遺跡
17．上ノ山遺跡	18．三崎古墳群	19．笹向城	

屋１号墳（註３）のように一辺が20mを越える方墳が築造される。出土遺物はなく詳細は不明である。なお、金屋１号墳には葺石が認められている。また、第２図の範囲外ではあるが目木平野の西方に位置し、米子自動車道路の建設に先立つ発掘調査でほぼ全容が把握された中原古墳群（註４）は、５世紀後半の箱式石棺を内部主体とする小方（円）墳で構成される。遺物も少なく墳丘の盛土もほとんどない、地域性の強い古墳群である。いずれも目木平野を基盤とする集団の古墳であり、その関連性が注目される。古墳時代後期になると、横穴式石室を主体部とする小円墳で構成される新池古墳群や多田古墳群が形成される。これらの古墳群は、昭和９年の室戸台風に伴う災害復旧工事により石室の石材が抜き取られていることが多く、詳細は不明である。また、目木川の南側にも三崎古墳群が形成される。こちらも横穴式石室を主体部とする古墳群であり、亀甲形陶棺が出土している。６世紀後半から７世紀にかけての古墳群と思われる。また、６世紀中頃には五反丘陵に白猪屯倉が設置されたと考えられている（註５）。白猪屯倉では、大化改新に先立ち、戸籍が作られ条里制が試行されたと考えられている。今日、目木条里（註６）がその地に比定されているが、白猪屯倉の時代にさかのぼる水田は検出されていない。

奈良時代になると、この地でも仏教文化が盛行し五反廃寺が創建される（註７）。出土瓦から、朝鮮半島にあった高句麗や新羅との関連性が指摘されている。また、五反廃寺の北東約１kmに大庭郡衙と考えられる西口遺跡（註８）がある。道路工事中に多量の土器とともに、墨書土器や円面硯などが出土している。

註１　松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告57』（岡山県教育委員会1984年）

註２　松本和男・船津昭雄「久世町の夜明け」『久世町史』（久世町史編集委員会1975年）

註３　註２に同じ。

註４　福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』（岡山県教育委員会1995年）

註５　『日本書紀』欽明天皇16年条。ただし、白猪屯倉の所在地については諸説あり、定まっていない。

註６　松本和男「目木条里」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』（岡山県教育委員会1982年）

註７　池上　博「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告２』（久世町教育委員会1997年）

註８　1985年に町道拡幅工事に伴って多量の遺物が出土した。大半が須恵器であり、若干の土師器が含まれている。時期的には奈良時代後期から平安時代初期に比定できる。

Ⅱ．発掘調査の経過

１．調査に至る経過

岡山県北部地域では、農業と密接に結びついた形で和牛の生産や飼育が行われてきた。久世町でも、江戸時代初期の段階から近郷の農家が肥育した牛馬を売り買いする牛馬市が開かれ（註１）、明治以降も引き続き牛馬市が開催され、近郷はもとより遠く大阪などから仲買人や牛馬市に伴って開催される商店街の売り出しを目当てに集まった人々でたいへんな賑わいであったという。

写真１　牛市で賑わう商店街（昭和初期？）

こうした伝統的和牛生産・飼育技術が基礎になり、明治末期に始まった乳牛の飼育は、戦後になって食生活の変化に伴って久世町全域に広まっていき、昭和30年代には生産農家や生産量ともピークに達した。しかし、昭和40年代後半に入ると高度成長による労働力の流失などによりしだいに減少に転じ、現在では町の南部を中心に十数軒の酪農家があり、乳価の低迷や人件費や飼料等の高騰など酪農を巡る環境の厳しさのなか、小規模経営を続けている。

五反地区は、戦後すぐに酪農に取り組んだ地域であり、近年まで久世町でも酪農家が多い地区であったが、ここ十年内外で漸減し、今日では数軒を残すのみとなっている。各農家が搾乳した牛乳は、集乳業者が大型タンクローリーで収集しているが、五反地区の町道は幅が狭いため、収集業務に支障をきたしていた。特に白猪屯倉の碑がある交差点は、タンクローリーの右折がたいへん困難であり、地元からも再三拡幅の要望があった。こうしたことから、久世町役場地域整備課では、平成11年度において町道五反線の拡幅を計画したのである。

平成10年12月になって、久世町役場地域整備課から教育委員会に対して具体的な計画が示されたが、当該地は、周知の五反廃寺の寺域の北辺部の一部が含まれていたために計画を見直よう求めた。しかし、周辺には民家が密集し、新たな用地収得も困難であることから、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

２．既往の調査

五反廃寺は、1926年（昭和元年）に永山卯三郎によって大庭寺址として紹介（註１）されたのが初出と思われる。その後は『日本書紀』に出ている白猪屯倉と五反廃寺との関係や五反廃寺から出土する瓦の研究に力点が置かれたが、発掘調査が行われることはなかった。

こうした状況の中、1978年（昭和53年）に寺域を南北に縦断する町道拡幅工事があり、初めて発掘調査が実施され、瓦溜まりや柱穴が検出された（註２）。その後、周辺地域の宅地化が進み、その波

が五反地区にも及んでくることが予想されたため、平成５年から平成７年度にかけて３次にわたって寺域の範囲と主要建物の把握のための学術調査が実施され（註３）、多くの知見を得た。

	調査年度	調査主体	調査原因	調査面積	主　な　遺　構
1	昭和53年度	岡山県教育委員会	町道改良工事		柱穴、瓦溜まり、土壙
2	平成５年度	久世町教育委員会	寺域確認調査	210㎡	溝、土壙
3	平成６年度	〃	〃	300㎡	掘建柱建物、溝、竪穴住居
4	平成７年度	〃	〃	135㎡	掘り込み地業、溝、貯蔵穴

第１表　五反廃寺発掘調査一覧

３．調査の経過

今回の発掘地点は、当初から五反廃寺の北端部が域内に含まれると見込まれていた。しかし、当該地は、1934年（昭和９年）に岡山県を襲った室戸台風により決壊した堤防や水田の復旧のために大規模に土取りが行われ、遺構の残存状況は必ずしも良くないものと思われた。

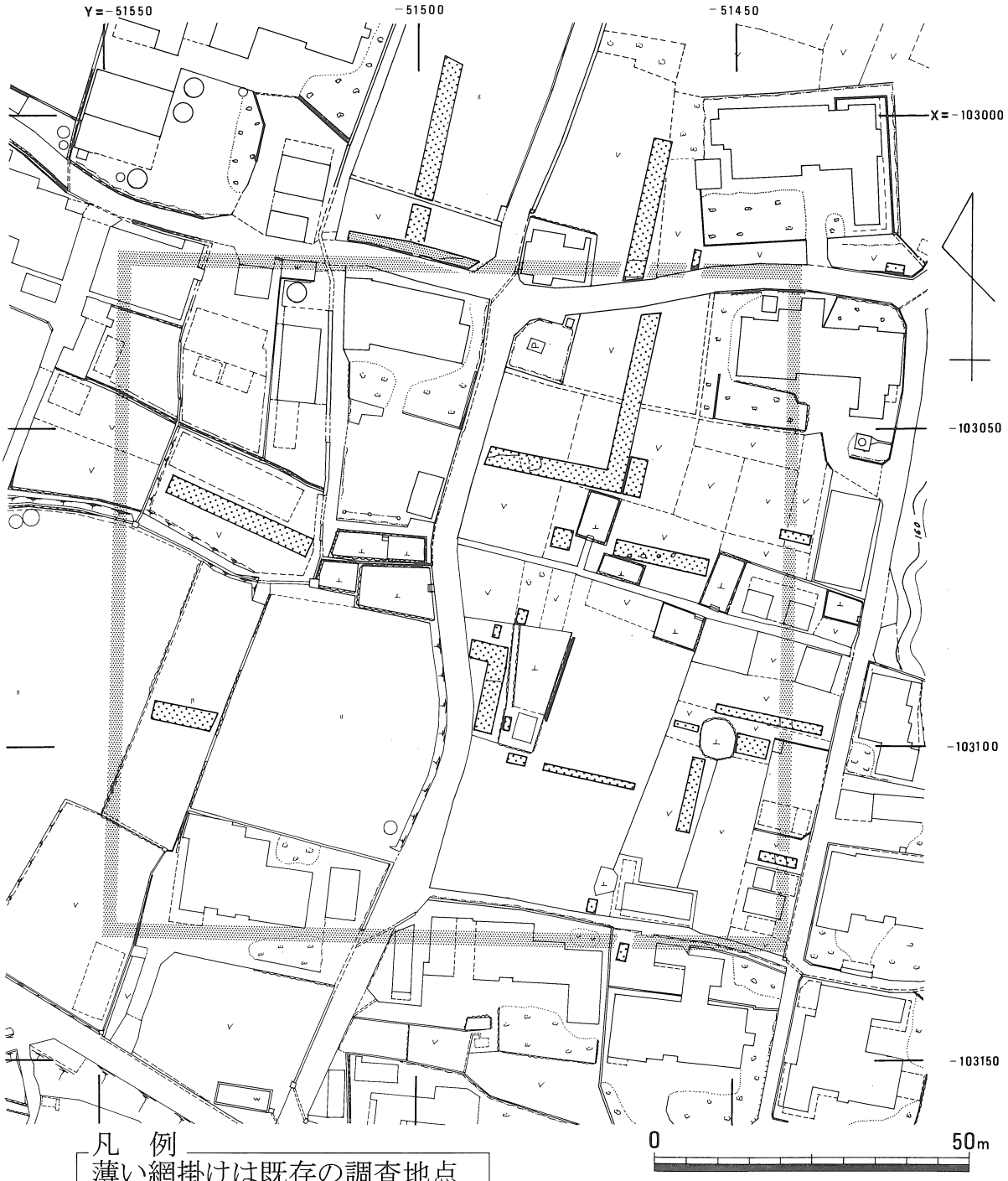
発掘調査は、平成11年８月５日から着手した。当初はすべてを手掘りで掘り下げる予定であったが、遺構面が深く時間がかかる見込みとなったために、重機による荒掘りを行なった。重機による掘り下げは１日で完了したものの、水田に水を張る時期と重なり一時的に地下水位が高かったことと、当該地が基本的に谷地形であり、地下水の水脈にあたっていたために湧水が著しく、掘り下げは困難であった。このため、壁面際に排水のための溝を掘り、常時排水ポンプを稼働させながらの作業となった。遺構の検出は、断面観察を先行させて把握に努めた。その後、トレンチ西端で溝状の遺構を検出したため、トレンチ西半部を重点的に調査することとした。その結果、ほぼ東西方向に延びる溝を検出し、この溝が寺域確認調査（註４）の時に検出された寺域の北端を画する溝の延長上に位置し、類似した規模と断面形状などから同一の溝であると判断した。すべての作業は８月23日に終了した。

註１　久世における牛馬市の成立年代は不明であるが、少なくとも元禄期と思われれる牛馬市の開催記録が残されている。

註２　永山卯三郎『岡山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第六冊』（岡山縣史蹟名勝天然記念物調査會1926年）

註３　『岡山県埋蔵文化財報告９』（岡山県教育委員会1979年）のＰ20に瓦溜まりの写真が掲載されているが、この瓦溜まりは中世の大溝に投棄されたものであることが判明している。

註４　Ⅰ章註７に同じ



第３図　調査地点位置図(1/1000)

Ⅲ．発掘調査の成果

１．遺　構（第４・５図、図版２～４）

調査区内の遺構の残存状況は、昭和９年の室戸台風の災害復旧工事の土取りにより、かなり削平されているものと思われた。しかし、大規模な削平自体は認められるものの、その実施時期は現代ではなく、時期的にかなり遡るものと思われる。平成５年から平成７年にかけて行われた寺域確認調査（註１）により、中世の段階で大規模な地形改変が行われており、この時の削平である可能性がある。基本的層序は、上部が耕作土と削平以後の堆積層であり、五反廃寺の溝は弥生時代の包含層を切り込み、底部はローム層に達していた。

ＳＤ１（第４・５図、図版３-２・４）

ＳＤ１は、調査区の東端で検出された。ほぼ東西方向を主軸とする溝である。削平により残存状況を良くないが、現状では深さ約0.3mを測る。幅については南側の肩が調査区外であったために不明である。底部はかなりフラットで壁面に至って急に立ち上がるいわゆるＵ字溝状を呈する。この溝は平成５年度に実施した寺域確認調査で検出した寺域の北辺を画する溝の延長線上に位置し、規模や断面形状も類似していることから両者は同一の溝と考えられる。ちなみに両者の水平距離は約29m、底部の比高差約0.5mであるので約2％勾配で西に傾斜していることになる。

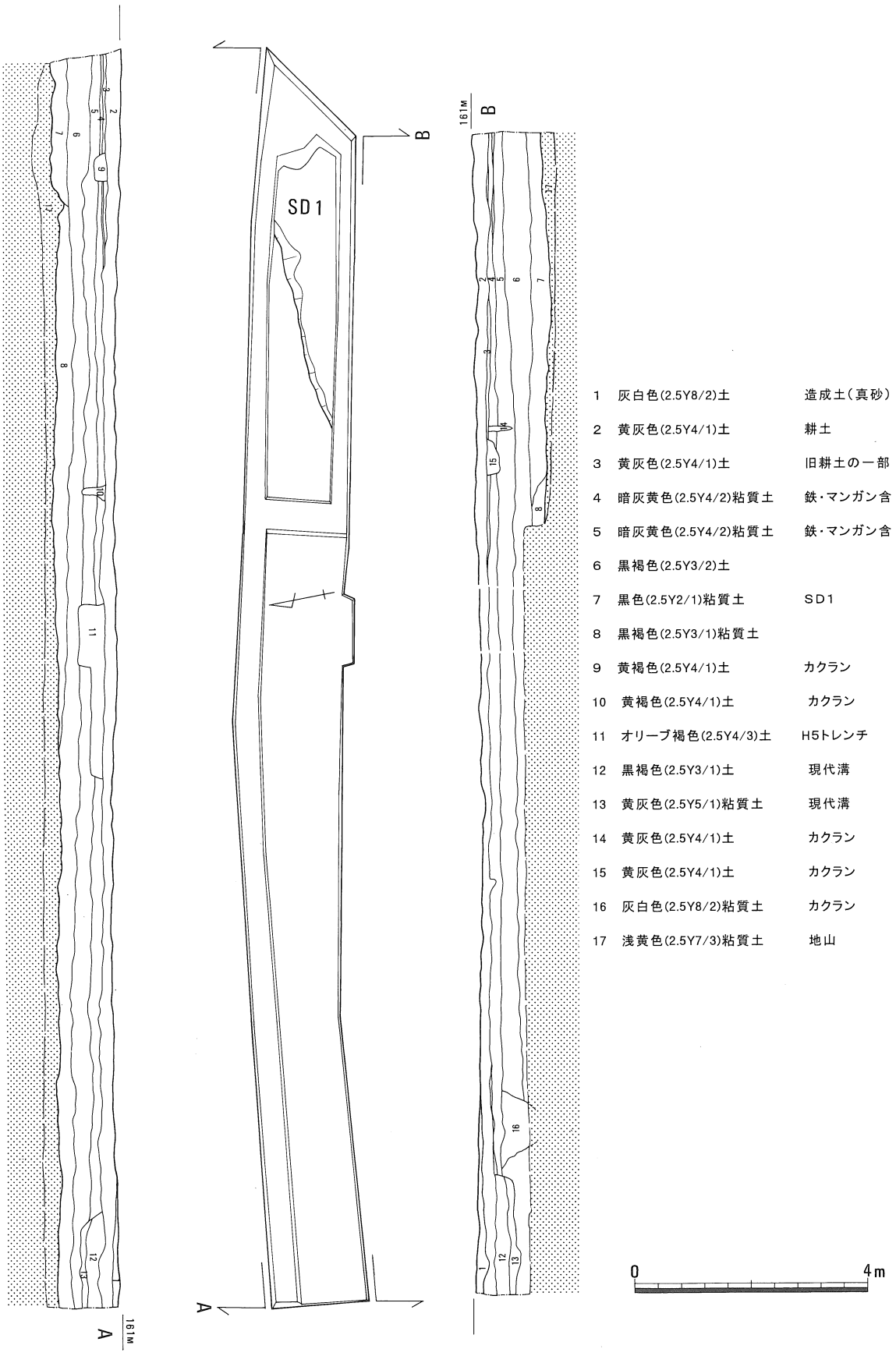
２．遺　物（第６図、図版５）

今回の調査で出土した遺物はコンテナ１箱程度である。すべて土器類と瓦類であった。土器類はすべて弥生土器であった。いずれも細片であったため、図示できるものはない。瓦類は軒丸瓦が１点のほかはすべて平瓦と丸瓦である。このうち、ＳＤ１からは若干の瓦が出土しているが、細片であり図示できるものはない。

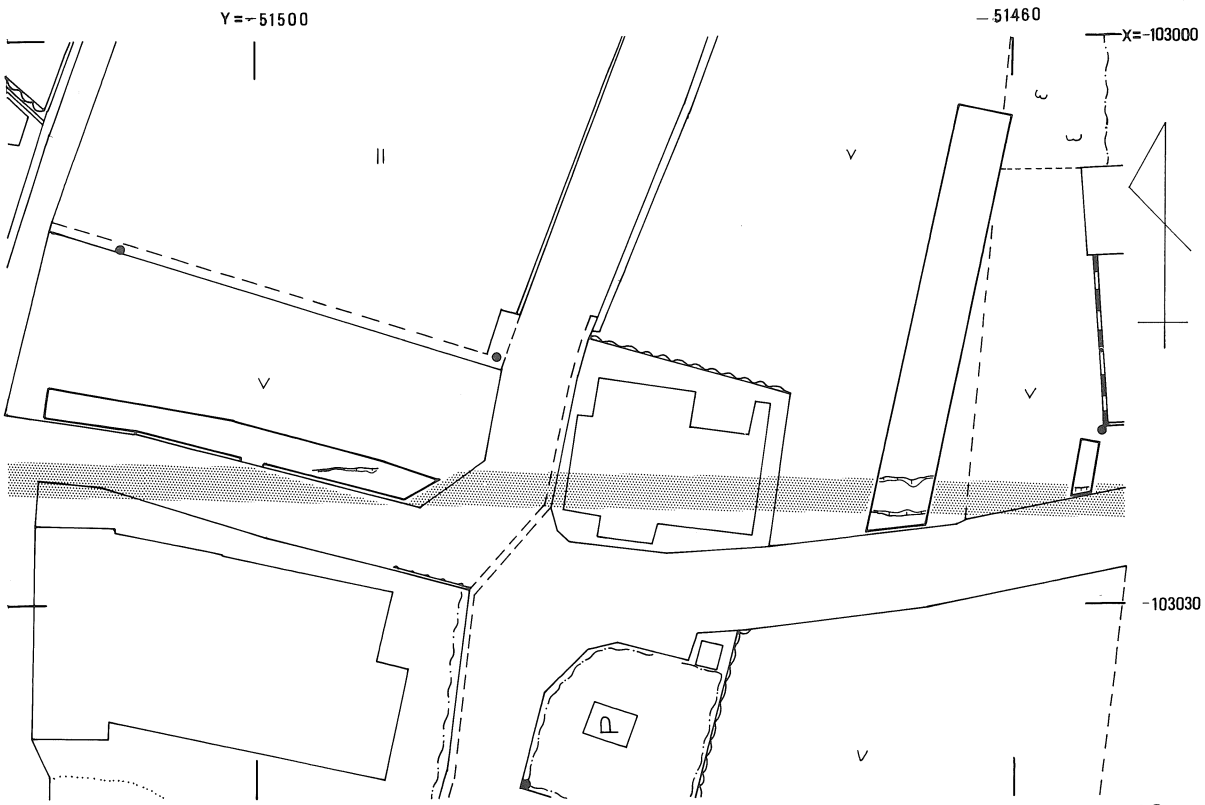
第６図は包含層中から出土した軒丸瓦である。この種の軒丸瓦は、五反廃寺の創建時に使用されたと考えられている（註２）。笵傷や細部の形状からＩＡ型式とＩＢ型式があり（註３）、今回の出土例は後者である。丸瓦部は脱落し瓦当部分のみとなっている。中房には１＋６の大きめの蓮子を置き、その周囲に８つの重弁を配する。外縁部には通常輻線文を巡らすが、外縁部そのものが剝落しているため不明である。瓦当裏面は、ヘラ削りが施された後不定方向のナデ調整が施される。瓦当径約16.5cm＋α、厚さは厨房付近で4.7cm、外縁部で約2.7cm＋αを測る。胎土には白色砂を多く含み、焼成は良好である。色調は、灰色ないしは灰白色を呈している。なお、Ｉ型式の軒丸瓦には、笵に粘土を充填する際に、先に中房部分に充填し、その後全体に粘土を加える技法が用いられており、今回の出土例は粘土の継ぎ目が明瞭に残る典型例である。

註１　Ⅰ章註６に同じ

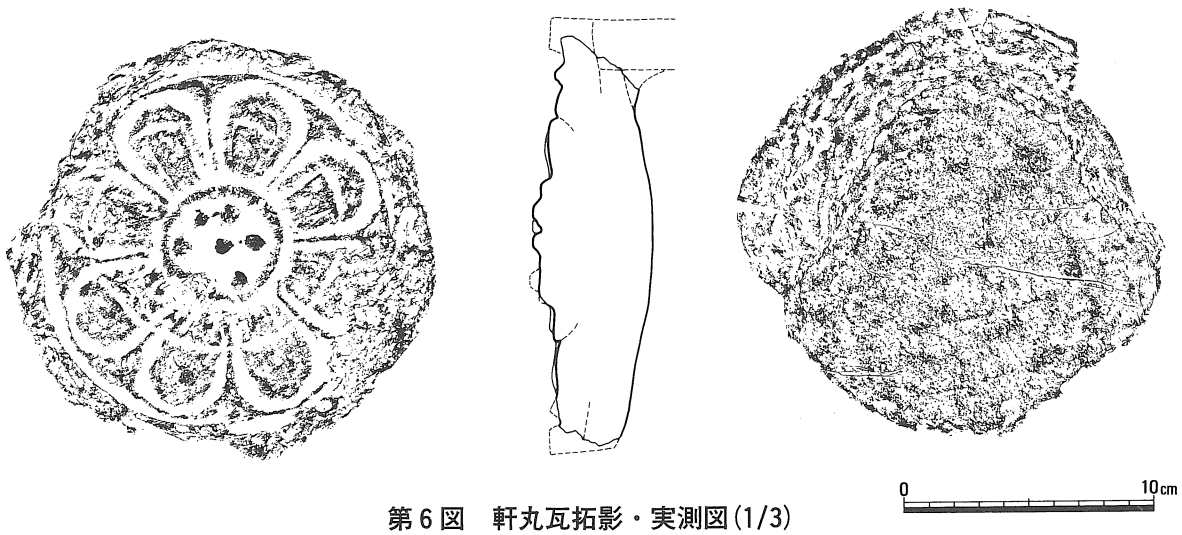
註２　松本和男・船津昭雄「久世町の夜明け」『久世町史』（久世町史編集委員会1975年）など



第4図　調査区および土層断面図(1/100)



第５図　ＳＤ１推定ライン(1/400)



第６図　軒丸瓦拓影・実測図(1/3)

註３　軒瓦の型式分類については、基本的に松本和男「五反廃寺」『岡山県史第二巻原始・古代Ⅰ』(岡山県史編纂委員会1991)に拠る。

Ⅳ．ま　と　め

今回の調査における最大の成果は、寺域北端ラインを明確化できたことである。しかし、もとより溝のみによって寺域が画されるものとは思われないが、後世の削平が寺域全体に及んでいることもあり、現状では築地塀なのか板塀なのかは明らかにできなかった。また、これで寺域北端及び東端は高い精度で確定することができたが、南端と西端については検出できていない。この点については今後の課題である。

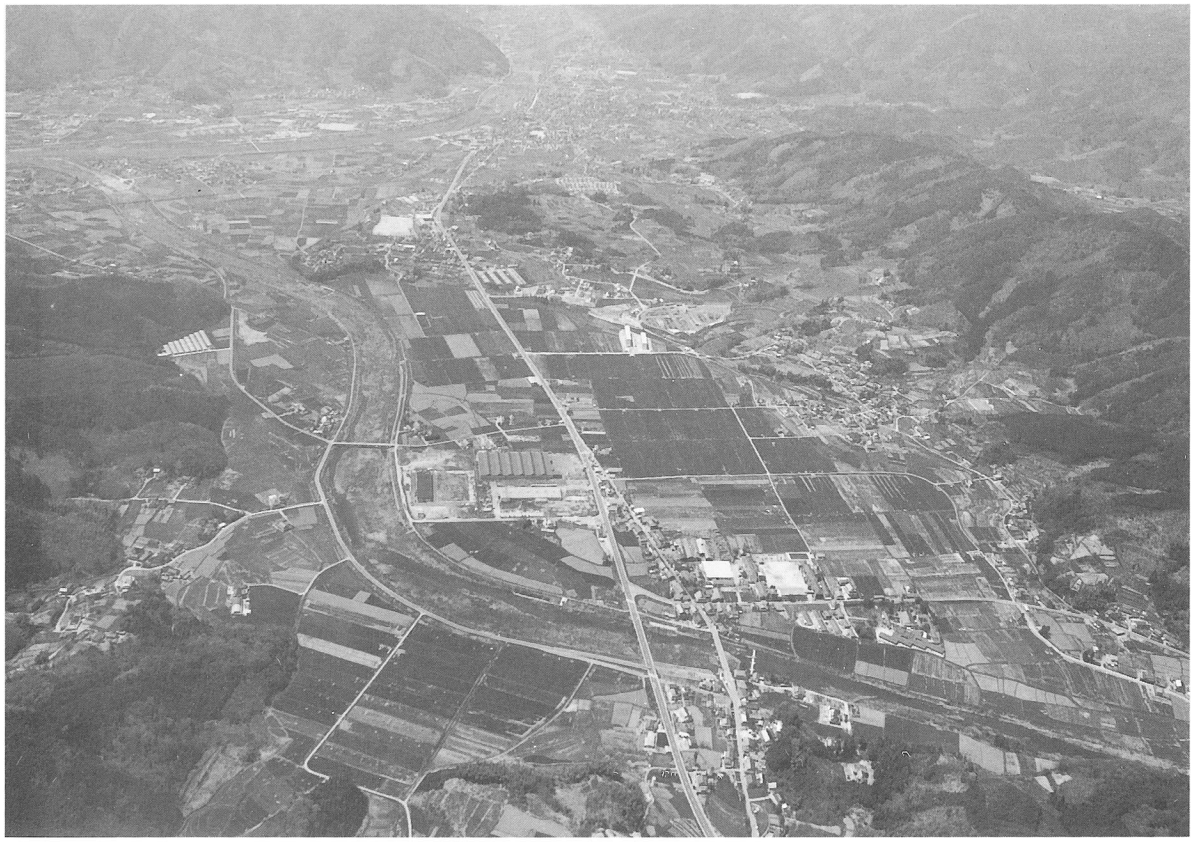
また、出土遺物については、Ⅰ型式の軒丸瓦が１点だけ出土したが、この瓦も中房に粘土を充填し、その後笵全体に粘土を充填する典型例であった。この種の瓦製作技法は、Ⅰ型式の軒丸瓦に多く認められるが、その技術的系譜についても今後の課題である。

報告書抄録

ふりがな	ごたんはいじ
書名	五反廃寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	久世町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第4集
編著者名	池上　博
編集機関	久世町教育委員会
所在地	〒719-3201　岡山県真庭郡久世町大字久世2935-5
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五反廃寺（ごたんはいじ）	岡山県真庭郡（おかやまけんまにわぐん） 久世町大字三崎（くせちょうおおあざみさき）	335843		35度 4分 8秒	133度 46分 10秒	19990805 ～ 19990823	35㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五反廃寺	社寺	奈良時代	溝	弥生土器・瓦	寺域の北辺を捉えた。



1．目木平野周辺（東から、航空撮影）

2．五反廃寺周辺（北西から、白猪屯倉碑）

図版 2

1．調査前状況（東から）

2．調査区北壁土層断面（南東から）

1．調査区南壁土層断面（北東から）

2．ＳＤ１土層断面（南西から）

図版 4

1．調査区全景（東から）

1．軒丸瓦（ＩＢ形式）

久世町埋蔵文化財発掘調査報告 4

五　　反　　廃　　寺

町道五反線改良工事に伴う発掘調査

2000年３月31日　発行

編集・発行　久世町教育委員会